〔書評1〕

# 福田晃著『南島説話の研究』

岩瀬　博

初めて南島の民俗社会を訪れた本土人がまず痛感するのは、南島における強固なまでの在地性の主張であろう。先ず自然のたたずまいの違いが目に飛び込んでくる。沖縄と奄美でも違いはあるが、特に沖縄の島は本土の島のありようとはかなり異なる。耳に飛び込んでくる言葉もそれが方言であるかぎり、ほとんど理解できない。衣食住の生活相にも違いのあることが分かる。すなわち今来の本土人はまず初めに南島文化の異質性に立ち向かうわけである。

本書のあとがきには著者が初めて南島を訪れた昭和四十六年のそうした驚きが素直に記されている。七年後、著者は本土・沖縄の有志による昔話合同調査の報告書（『沖縄地方の民間文芸』昭和五十四年二月刊　三弥井書店）に、「あえて言うならば、沖縄方言は日本本土方言に対するもので、日本語圏に含まれることはまちがいない。そして、われわれ本土班も日本人の一部であって、沖縄地方の民俗に、異質性のみならず、多くの同質性を感得する者たちである」（〈概説編〉「昔話」）と書き記している。

著者は異質性の遭遇から始まった南島訪問を二十年余にわたって続け、やがて同質性を感得するに至ったわけだが、本書はそうした実感を、南島説話研究の上に実証した研究書である。

南島説話の異質性との遭遇で発せられる言葉は、〝南島説話とはいったいなになのか〟であろう。それに応えたのが、〈第一編　南島説話の始原〉の論文「南島神話の伝承世界」である。本土では文献神話に地位を奪われ、「既に亡びた」とされる口頭伝承の神話が南島では今もって生きていることを事例をあげて分析し、本土ではほとんど見られない民間神話を概観する。

本書のサブタイトル「日本昔話の原風景」の命名に窺われるように、著者は一見、異質性に覆われているふうに感じられる南島説話に、同質性を感得する。すなわち現在の南島説話に日本昔話の原風景を見る。表現すれば簡単であるが、実際に実証することは誰にでもできることではない。著者は説話伝承学者であるが、それ以上に中世伝承文学の学者として知られる。日本の「古代」伝承文学への深い学識がその実証を可能にした。第二編以下は日

本伝承文学の研究者による南島説話の分析が展開される。

〈第二編　南島説話の系譜〉は南島説話のルーツを明らかにし、それらが日本説話の系譜に連なるものであることを精緻な論で説く。現在本土で伝承されていない南島説話が採り上げられ、しかしその伝承も本土の伝承を遡れば本土に共通する伝承であることが証明される。採り上げられる説話は「兄妹婚姻譚」「日光感精説話」「宿神ガタリ」である。「兄妹婚姻譚の行方」は南島の兄妹婚姻譚を兄妹漂着型、兄妹降下型、兄妹同穴型に整理し、その類型の中に、人間の始祖、国土起源、穀物起源など創世神話のモチーフが複合し、様々な形で展開していることを指摘し、その底流には原始的発想である兄妹婚の聖意識が堅持されていることを説く。一方、古代にあって兄妹二神の創世神話と陰陽二神の創世神話があったが、神道体系の成立のもと、兄妹相姦は「国つ罪」とされ、兄妹二神の伝承を後退させた本土でも、中世以後、兄妹始祖譚は本地垂迹思想とつながり、神仏前生譚や道祖神伝承の中に兄妹相姦を聖婚とする観念が生き続けていることを語り物や縁起類などの分析をとおして論証する。

「日光感精説話の重層性」は南島の日光感精説話邂逅型を採り上げ、本土の修験系巫女祭文との叙述構造を比較検討し、本土に古く存在した日光感精説話が奄美・沖縄のそれに影響を与えたとする。「宿神ガタリの系譜」はいたましい死に方によって激しく祟る死霊神の祭祀伝承を南島に辿り、それが本土の宿神ガタリに連綿とつながっていることが論述される。

〈第三編　南島説話の展開〉はさまざまな説話の南島における種々相が考察される。まず、本土に共通する伝承である「天人女房譚」、「悪神祭祀譚」が採り上げられ、それらの説話が南島の民俗の中で独自な機能を獲得していることが詳述される。

「木の精由来譚の位相」は南島の妖怪、すなわち奄美のケンモン沖縄のキジムナーが自然、風土と関わって、さまざまな常民の心意伝承としての説話に展開されている実態が考察される。沖縄には葬式に参列し、念仏を唱える念仏者の存在が確認されるが、「ニンブチャーの文芸」と「念仏『仲順流れ』前後」は彼らが伝承した念仏文芸を考察したものである。それらが本土の唱導、和讃に連なることを明らかにし、本土の念仏者、俗聖が沖縄に伝えたことを論証する。

著者はかねがね日本昔話の研究に近隣諸国を視界に入れることの必要性を唱えてきた。本土昔話の研究にもその視点は必須であるが、「日本昔話の原風景」として存在する南島独自の昔話の研究には、南島の持つ歴史的、地理的条件を鑑みるに特に要諦される視点である。〈第四編　南島説話の比較〉はそうした著者の態度から生れた国際的比較を視野に入れた論考である。

鹿児島県と沖縄県にのみ分布している昔話に「偽の花嫁」がある。「昔話『偽の花嫁』の行方」はその国際伝播を論じたものである。著者が新たに採訪した新資料を報告した上で、「偽の花嫁」は中国大陸、台湾に蛇聟入（水乞型）と複合した話型で分布していることを指摘し、その関連を論じる。その上で、わが国の「偽

の花嫁」が南島の民俗社会に則した心意伝承として展開していることを論証する。

古代人は蛇体を大いなる自然の象徴として見、神聖視した。にもかかわらず、昔話では水乞型蛇聟入に見るとおり蛇体との婚姻を否定するばかりではなく、退治される邪悪なものとして描かれる。現在伝承の中心である典型話が本来のものであったのか。積極的に蛇体との異類婚を至福と語る昔話（単純婚姻型）を南島に見たところから「水乞型蛇聟入の古層」が生れる。単純婚姻型は南島ばかりではなく、丹念に探すと本土にも少数ながら存在する。著者はここでも中国マレー半島の事例を採り上げ、「単純婚姻型の伝承は大いなる自然の象徴なる蛇体を、人間の至福を将来する存在と観じ、その聖なる存在の社会を、俗なる人間社会の一続きの地平に認める精神風土に支えられてきた」と指摘する。婚姻を転生によって認める話型や婚姻を否定、退治する話型を広く日本や東アジア、東南アジアに求め、その話型の分析を通して、それらの伝承の深層に人間の幸福が蛇体に象徴される聖なる自然に将来されるという観念を保持させていることを指摘し、水乞型蛇聟入の複層のなかに、文明史が切り捨てた原始回帰の思想の執拗さを読みとっている。

南島には七夕伝承と結ぶ「天人女房」の他に、北斗七星など星の形態を説く「天人女房」の伝承が認められる。さらには羽衣を要しないおしかけ女房型の星由来の「星女房」も存在する。「昔話『星女房』の行方」は南島における羽衣型「天人女房」と「星女房」の伝承の実態を克明に分析したものである。羽衣型「天人女房」が農耕儀礼とかかわり、天女の豊饒性を説くものであることは既に指摘されているが、著者は「星女房」も南島の農耕儀礼に関わって展開される群星信仰、七星信仰のもとに天女の豊饒性を説きながら豊かに伝承されたものであろうと説く。

南島説話の異質性に遭遇し、やがて同質性を感得した著者であったが、本書は異質性、同質性を超越して、本土と南島を貫く普遍性を追究した著と言っていい。普遍性を実証する方法として、話型を基礎とした本土、南島両説話の一貫性が先ず求められる。話型を通時論的に分析することによって、先ずは南島説話の系譜を明らかにし、次いで南島と本土説話を総合することによって失われた本土伝承を復元し、日本列島の説話の全体像を追究するという方法を採っている。日本説話の研究が本土伝承を中心に構築されている研究の現状にあって本書は汎日本の説話研究を切り開いた金字塔的好著と言えよう。

南島説話を本土説話に重ねて南島説話の系譜を本土伝承につなげただけの論であれば日琉同祖論の蒸し返しに終ったであろう。しかし著者は話型の普遍性に終始するのではない。普遍性に収斂しつくされない南島説話の独自性をその風土・歴史に基づく民俗社会との関連の中で論及している。あとがきにも触れられているが、著者が最初に南島を訪れた沖縄の若い採訪仲間が「正直に言って、本土の先生方の調査を歓迎したい気持ちと同時に、我々の郷土に来てほしくないという気持ちも半分程ある」との感想を漏ら

した時、著者は「十年間は沖縄に来続ける」と応えた。その約束は南島の説話研究を「旅人の学問」としないという著者の決意であったろう。著者の南島訪問は十年間はおろか二十年を越えてなお続行中である。郷土人でない著者が南島説話の独自性を民俗社会との関連の中で論及することは至難の業であるが、諸論文に、研究者としての良心を核として、それが展開されていることも本書の素晴らしさであろう。

本書を批判的に読み進めた点もいくつかある。が、既に紙数が尽きて具体的に指摘する余裕はない。蓋然性に委ねられている推論が時に顔を見せること、報告された事例を話型的に整理する時、その整理の仕方が、主張に引きつけられて恣意的に処理されていることを感じたことだけを申し添える。論文執筆以前の著者の発想は広く、それが論の豊かさを導いていることは確かであるが、時として記述が論の趣旨を越える部分もあり、読む者に煩雑な印象を与える。それが特に初学者に論旨の曖昧さを与えなければ幸いである。

（平成四年三月刊、法政大学出版局、五五二頁）

（いわせ・ひろし　大谷女子大学教授）